

## ベニシアが新型コロナに感染 1か月で体重が18キロ減……「長くないかもしれない」と思うと僕は涙が流れた

2024/9/24 読売ドクター

### 梶山正の「ベニシアと過ごした最後の日々」

2023年6月に亡くなったハーブ研究家のベニシア・スタンリー・スミスさんの夫、梶山正さんが、妻と過ごした最後の日々をつづります。

#### ホーム内で隔離生活



2022年7月、ホームが面会禁止になる3日前のベニシア（左）。宝が池公園を散歩中に孫の喜真と

目が悪くなり、グループホームに入ったベニシアを僕は毎日訪問し、一緒に公園を散歩し、アイスクリームを楽しむ日々を送っていました。そんなささやかな喜びが、ある日突然断たれることとなります。グループホーム内で新型コロナ陽性者が確認され、2022年7月12日から面会禁止になったのです。毎日の面会の義務から解放された僕は、はじめの数日間だけはホッと一息をつく気分になりましたが、だんだん不安が募っていきました。

「ベニシアさんのコロナ陽性を確認しましたので、彼女の部屋に隔離しています」。7月28日に、ホームの介護福祉士から電話がありました。

「ベニシアはどんな具合ですか？」と僕。

「はい、大丈夫ですよ。ベニシアさんは元気にして

ますよ」

コロナにかかったのに元気って、と疑問に思いましたが、それ以上の確認はできません。

それからわずか数日後の8月上旬にホームから電話があり、僕は尿パッドと歯磨き粉をドラッグストアで買い、ホームへ持って行きました。面会禁止中なので、玄関の外で介護福祉士にそれを手渡しました。

彼は「じつは僕もコロナに感染して昨日まで休みをもらっていました。38度ぐらいの熱が出て、味覚もなくなり、しんどかったです」と予期せぬ発言。いつも僕を避けるような人だったので「アレッ、どうしたの？」と思いました。かつて、終末期医療の病院にベニシアを移そうかと考えて、僕がそこにコンタクトして以降、彼は僕にあまり話さなくなると記憶しています。今日の彼は、コロナから回復して久しぶりに出勤できてうれしかったのかもしれませんが、とはいえ数日前に、ここでコロナに感染したベニシアの夫の僕は、暗い気持ちが続いていました。

8月22日、ホームからの電話を受けて、僕は不足している生活用品を届けに行きました。面会禁止は続いているので、玄関の外でヘルパーの若い男性にそれを渡しました。

「ベニシアは大丈夫ですか？」

「元気になっていますよ！」

それ以上、彼は何も言いませんでした。ここで働いているヘルパーは20代ぐらいの若者が多く、顔ぶれもよく変わりました。あとで分かったことですが、ベニシアは8月20日から発熱、倦怠（けんたい）感、痰（たん）がらみの咳（せき）など肺炎のような症状が続

いていました。この日も、彼女の体調は悪かったはずで

## バプテスト病院に入院

2日後の8月24日朝の10時前にグループホームから電話がありました。ベニシアが肺炎になっているかもしれないので病院へ連れて行くが、入院の可能性もあるので僕も付き添うようにと言われました。緊急受診を申し込んだ日本バプテスト病院の待合室に入ると、僕はグループホームの介護責任者である介護福祉士の顔を見つけました。

「お世話になります。どんな状況ですか？」

「ベニシアさんは先ほど看護師さんが検査室へ連れていきました。今は先生から呼ばれるのを待っているところです」

僕は質問したいことがたくさんありましたが、診察が始まったら聞けるだろうと思い、そのまま待つことにしました。しばらくすると、「やるがあるので、私はこれで失礼します」と彼はどこかへ去っていきました。

やがて名を呼ばれた僕は、湊（みなと）先生という50代ぐらいの女性医師が待つ診察室に入りました。ベニシアの姿はそこにありません。

「いつ頃からベニシアさんの様子が、今のように変わってきたのですか？」

「あ、僕はベニシアの夫です。ホームから呼び出されて、ちょっと前にここへ来たところです。ひと月ほど僕は彼女に会っていないので、わかりません」

「グループホームの人はどこにいますか？」

「さあ、帰ったのかもしれませんが、先ほど……」

「え～どうして？ じゃあ私は誰に聞けばいいのですか？」

## 痩せこけた姿



入院してひと月ほど。退院の前日、重い車のベニシア（中央）を息子の悠仁（左）とともに病院の敷地内を散歩させた（2022年9月）

先生の説明によると、ベニシアはかなり弱っているの

で、しばらく入院して様子を見る必要があるということでした。診察室のある2階から入院病棟がある4階への移動区間だけ、僕は付き添うことになりました。ストレッチャーに寝かされて、腕に点滴のチューブをつないだベニシアが運ばれてきました。

ひと目見るなり「死にかけてるやんか……。なんでこんな状態になるまで放置しとくんや。ホームに騙（だま）された」と僕は思いました。

「ベニシア、タダシだよ。大丈夫？」と声をかけると、僕が誰なのか彼女は分かったようでした。でも衰弱してしゃべる力がないのか、口がきけません。生命力があまりないと感じられました。すごく痩せこけている。

「今日の体重は37キログラムでした」と看護師さん。最後に会った7月上旬は55キログラムぐらいあったので、18キロも痩せたことになります。7月28日にコロナにかかってから、おそらくこの1か月近くのあいだ、ほとんど食べていないのかもしれない。

4階にエレベーターが着いて、ストレッチャーを廊下に押し出すと「今日はもう、ここまでですよ」と看護師。入院病棟に運ばれていくベニシアを見送って、僕はホールのベンチに座って入院申し込みの書類に記入していました。

「コロナのため、ご家族の方も面会禁止となっています」と事務員から一通り説明を受けます。

「おそらくベニシアはもう長くない。ここで亡くなることになるのかもしれない」と思うと、涙が流れました。(梶山正)

### 梶山正 (かじやま・ただし)



写真家。1959年、長崎県生まれ。ネパール・ヒマラヤでのトレッキングの後、インドを放浪し、帰国後は京都でインド料理店を開く。92年、店の常連客だったベニシア・スタンリー・スミスさんと結婚、96年に京都・大原の築100年以上の古民家に移住。山岳雑誌などで活躍。近著に「ベニシアの『おいしい』が聴きたくて」。ベニシアさんとの共著に「ベニシアと正、人生の秋に」「ベニシアと正2 青春、インド、そして今」「ベニシアと正3 京都大原・二人の愛と夢の記録」など。